

プロフィール：手塚 光、Hikaru Tezuka

所属：名古屋夜間動物救急センター、院長

演題名：異物により消化管穿孔を起こした犬の 1 例

はじめに

犬や猫において異物の誤食は一般的に遭遇する疾患の 1 つである。異物のサイズや種類によっては消化管閉塞を引き起こして重篤な状態に陥る可能性がある。今回、2 週間以上前に誤食した異物により慢性的な消化管閉塞を起こして消化管穿孔に至った症例を経験したので、その概要を報告する。

症例

12 才，ミニチュア・ダックスフント，未去勢オス。10 日前から繰り返す嘔吐と食欲の低下を主訴にかかりつけ医を受診。点滴と制吐剤による治療を行うも改善はみられなかった。治療開始から数日後には食欲は廃絶し，当院を受診する当日にバリウム検査にて造影剤の滞留が確認された。そのため，原因の究明のために翌日に二次施設を受診する予定であった。造影検査の帰宅後から横臥状態となり，動かないとのことで当院を受診。意識レベルは侵害刺激に対して反応しない事から昏睡状態であった。四肢は冷感で脈圧は触知できず，口腔粘膜は蒼白で毛細血管充満時間（CRT）も評価できなかった。腹部超音波検査では広域にわたる腸管の拡張と腹水がみられた。腹水を採取して顕微鏡で観察すると細菌塊と貪食像が確認でき，血中のグルコース濃度は 60 mg/dL に対して腹水中では 25 mg/dL であった。以上から腸管穿孔による細菌性腹膜炎による敗血症性ショックと診断した。

治療

輸液による初期蘇生を行なうも，十分な反応がみられなかった。そのため，7%高張食塩水とノルアドレナリンを併用した。高張食塩水投与後は侵害刺激に対して反応するようになった。ショック状態から完全に離脱はできていないが，責任病変のコントロールが必要と判断したため開腹手術を実施。開腹すると空腸で異物が閉塞しており，その周囲で広範囲に穿孔が確認された。穿孔している領域を切除して腸管吻合を実施。腹腔内を洗浄と腹腔ドレーンと頸部食道カテーテルを設置して手術を終了とした。

考察

本症例は異物の可能性はないということであった。しかし，数週間前までの行動を確認したところ誤食が判明した。頻回の嘔吐や食欲不振の症例では鑑別診断に消化管内異物の可能性を忘れず，腹部の精査と問診の重要性を再認識させられた。